



JSTCT

Letter No.89

Japanese Society for Transplantation and Cellular Therapy

一般社団法人 日本造血・免疫細胞療法学会

January 2023

目 次

第45回日本造血・免疫細胞療法学会総会のご案内	ii - iii
認定・専門医制度委員会からの報告とお知らせ	iv - v
看護部会企画「第45回日本造血・免疫細胞療法学会総会で「わくわく」する体験を」	vi
私の選んだ重要論文「虎の門病院 リハビリテーション部 市川 雄大 先生」	vii
施設紹介「神戸大学医学部附属病院 腫瘍・血液内科」	viii - ix
会員の声「九州大学病院 血液腫瘍科 森 康雄 先生」	x
各種委員会からのお知らせ	xi

● 未納分年会費のご納入について

未納分の年会費につきましては、通年ご納入いただくことが可能ですので、学会HP「[年会費について](#)」をご参照の上、お早目にご納入いただきますようお願い致します。[会員マイページ](#)からクレジットカードでのご納入も可能となっておりますので、ご検討いただけましたら幸いに存じます。

● 本学会会員情報へのご登録内容変更について

ご勤務先の変更等に伴いご住所、メールアドレス等会員登録情報に変更がございましたら、[会員マイページ](#)よりご変更いただくか、Eメール、FAX等にてお早目に事務局までお知らせください。

[→学会HP「登録情報の変更・休会・退会について」](#)

● ご登録いただいているご住所について

本学会では、会員の皆様に対する重要書類、学会総会抄録号などをご登録頂いている住所にお送りしています。宛先不明で返送されてしまった場合、それ以上の対応ができなくなるおそれがありますので、ご自身でのご対応をよろしくお願い申し上げます。

● ご登録いただいているメールアドレスについて

本学会では、皆様に対する各種ご案内の多くをEメールにて配信しておりますが、昨今、アドレス変更の届出漏れが多く、メールが不達となる会員の方も多数みられます。一定期間、事務局からのメールが届いていない方は、一度、事務局（jstct_office@jstct.or.jp）までお問合せくださいますようお願い申し上げます。

【JSTCT事務局より】

第45回日本造血・免疫細胞療法学会総会のご案内

会期：令和5年2月10日(金)～12日(日)

会場：名古屋国際会議場

第45回日本造血・免疫細胞療法学会総会 会長 赤塚 美樹
(名古屋大学大学院医学系研究科 分子細胞免疫学 特任教授)

第45回日本造血・免疫細胞療法学会総会を2023年2月10日から3日間の会期で開催します。昨年5月の第44回総会から8ヶ月の間隔での開催となりましたが、420題もの演題登録をいただき、応募いただいた方々には心より感謝いたします。他方、国内では、昨年末より最大級の第8波が到来しており、学会時にはピークアウトをしていることを祈るばかりです。心強いことに1月10日時点ですでに845名の事前登録をいただいております、その67%の方が現地参加予定で、現地参加主体の開催機運は高まっております。もちろん現地参加が出来ない方には多くのセッションでWEB参加が可能となっておりますので、ご安心下さい。詳細は抄録をご覧くださいますようお願い致します。

さて、学会総会の紹介をさせていただきます。今回のテーマは“Let's get excited about new technologies in transplantation and cell therapy”であり、“Cell therapy”として会長シンポジウムでは国内外の第一線の研究者にCAR-T細胞療法のリアルワールドデータを中心にご講演いただきます。その中でCameron Turtle教授にはCAR-T細胞療法についてkeynote lectureをお願いしております。また“New technology”として最近彗星のように出現し、今や腫瘍・免疫微小環境の研究では必須となったシングルセル解析・マルチオミックス解析に関するシンポジウムを設け、CAR-T治療におけるバイオマーカー研究とGVHDに関する新知見を紹介していただきます。専門的な内容が含まれますが、このような解析が(まだ高価ですが)身近なところに来ていることが実感できるかと思います。なお以上の2つのシンポジウムは同時通訳付きです。WEBで通訳を流します、スマホ(またはラップトップデバイス)とご愛用のイヤホンをご持参下さい。イヤホンをお持ちでない方には有線イヤホンを用意しております。またもっと詳しくマルチオミックス解析を学びたい方のために教育講演2を用意しました。

シンポジウム4「細胞治療 産官学連携」では、これからの遺伝子改変免疫細胞療法をいかに国内でもシームレスに進めて行くか議論します。シンポジウム1「造血細胞移植におけるHLA研究の新展開」では最近話題のHLA分子のシグナルペプチド多型とNK細胞の関係や、その他の最新の話題を紹介頂きます。シンポジウム2では最新のSOS/VODに関する知見に迫って参ります。誌面の関係で全ては紹介できませんので抄録をご覧ください。

さて、さまざまな治療法の登場で選択の幅はますます広がって参りましたが、他方で現場の医師の悩みも増えているのが実情ではないでしょうか。ワークショップ2と3、さらに3回にわたるPro・Conセッションではそのような課題について議論を深めたいと思います。この5セッションの中の4セッションではサイドスクリーンを用意して、スマホ等から参加者の考えを問うオンライン投票や、気になるキーワードをリアルタイムで表示するインタラクティブな仕掛けも用意します。どのような背景の参加者がどのように考えていたかをAI解析して洞察するコーナーも準備中です。どうか積極的に投票して、大いにセッションを盛り上げていただきま

すようお願いします。

看護師、HCTC、コメディカル企画も多数用意しております。看護特別講演ではシアトルのLTFU看護師であるDavisさんに同時通訳でご登壇頂き、国情を踏まえた議論の場を設けます。詳細につきましては年次集会プログラム委員会「移植看護とチーム医療」領域リーダーである名古屋大学病院看護部の山本陽子さんが今号のJSTCTニューズレターに寄稿しておりますので、そちらをご覧ください。

新企画としてMeet the Expertセッションを第2日目、3日目のランチョンセミナーの直後に行います。最新技術を学んだり、海外の人脈を広げるには海外学会への参加や留学が必要かと思われそうですが、なかなか困難なご時世です。そこで海外招請演者とのディベートを通じて、そのような機会の端緒になることを祈りつつ、海外演者と約1時間を過ごす企画を作りました。事前予約制で1月17日より登録を受け付けますので、学会ホームページより応募下さい。ファシリテーターにリードしていただきますので、安心して楽しんで下さい。なお、多くの聴衆が参加しやすいようにランチョンセッション後にポスターセッションを配置しましたのでご注意ください。

さて学会総会は2月12日(日曜日)午後の表彰式と記念講演・プレナリーセッションで15時過ぎには終了となります。遠方の方にはゆとりを持って帰路についていただけたと思います。まだ時間に余裕のある方は是非市民公開講座に引き続きご参加下さい。骨髓バンク・さい帯血バンク移植5万例達成記念イベントを兼ねて、同種造血幹細胞移植の普及に大きな影響を与えたドナーソースの多様化の歴史を、各種移植を受けた患者さんの体験談を交えながら振り返って参ります。後半ではさい帯血移植経験者である歌手の岡村孝子さんが大谷貴子さんの司会で体験談を語られます。歌唱の披露はありませんが、多くの会員のご参加を期待しております。

最後になりましたが、学会会場では現在求められているコロナ感染症対策を万全に行います。ご参加に際しては、基本的な感染防止対策をお守りいただき、参加者全員が安心して学会を楽しんで頂けますようご協力をお願い申し上げます。では、名古屋でお会いしましょう。

認定・専門医制度委員会からのお知らせ

認定・専門医制度委員会委員長 黒川 峰夫

■ 第45回学術総会における認定医企画について

1) 認定医申請のための教育セミナー

本年の教育セミナーは、WEBによるオンデマンド配信（公開期間中、受講者が自由にWEBにアクセスして閲覧する形式）での開講を予定しております。

【オンデマンド配信期間】 2月13日(月)～3月31日(金)

※聴講には第45回学術総会への参加登録が必要となります。

【プログラム】例年の通り、以下の5分野10単位分のセミナー開講を予定しています。

No	分 野	細 目	講 師
①	(A) 同種造血幹細胞移植の適応とドナーの選択	成人	中瀬 浩一
②		小児	梅田 雄嗣
③	(B) 移植後の拒絶と移植片対宿主病	移植片の拒絶・生着不全とその対策	原田 介斗
④		GVHDの診断と治療	橋本 大吾
⑤	(C) 拒絶・移植片対宿主病以外の移植後合併症	感染性合併症	木村 俊一
⑥		非感染性合併症	篠原 明仁
⑦	(D) 骨髄・末梢血幹細胞の採取と処理、ドナーの安全性と管理	骨髄	石山 謙
⑧		末梢血	藤井 伸治
⑨	(E) 移植前処置の選択	成人	大和田千桂子
⑩		小児	坂口 大俊

【ご留意事項】

- ・事前の受講申請は不要で、公開期間中どなたでもご自由に聴講いただけます。
- ・単位申請については、聴講後、受講料を指定口座にご納入いただいた上で、申請フォームによりご申請いただく方法となります。詳細は学会HP「[認定医申請用教育セミナーについて](#)」よりご確認ください。
- ・「教育講演」とお間違えのないようご注意ください。

2) 認定医更新セミナー

本年の更新セミナーは、会場開催／WEBによるLIVE配信およびオンデマンド配信での開講を予定しております。過年度を踏襲し下表の対象講演に対して更新単位を付与いたします。

▼会場開催／LIVE配信（WEB）のセッション【開催日時順】（オンデマンド配信も実施※）

セッション名	開催日時	会場	付与単位
シンポジウム1	2月10日(金) 16:20～18:20	第1会場	2単位
シンポジウム2	2月10日(金) 16:20～18:20	第3会場	2単位
会長シンポジウム	2月11日(土) 13:10～15:10	第1会場	2単位

《次ページに続く》

シンポジウム3	2月11日(土) 8:45～10:45	第1会場	2単位
シンポジウム4	2月11日(土) 8:45～10:55	第2会場	2単位
シンポジウム5	2月11日(土) 8:45～10:45	第3会場	2単位
造血幹細胞移植推進事業フォーラム	2月12日(日) 9:00～10:00	第4会場	1単位
シンポジウム6	2月12日(日) 9:00～11:00	第1会場	2単位
プレナリーセッション	2月12日(日) 14:15～15:00	第1会場	1単位

※上記セッションは**2月28日(火)～3月31日(金)**の期間、オンデマンド配信も予定しております。ただし、都合により一部セッションがオンデマンド配信対象外となる場合がございますので予めご了承ください。

▼オンデマンド配信 (WEB) のみのセッション

セッション名	配信期間	視聴方法	付与単位
教育講演1～18(全18講演)	2月13日(月)～3月31日(金)	WEB会場	各1単位

【留意事項】

- 会場での聴講、WEBによるLIVE配信での聴講、会期後のオンデマンド配信による聴講のいずれも単位付与の対象となりますが、同一のプログラムを会場(またはWEBによるLIVE配信)とオンデマンド配信の両方で聴講した場合でも付与される単位は1回の聴講分のみとなります。
- WEBによるLIVE配信の視聴と会場で開催されている更新セミナーの聴講を同時に行うことは認めておりません。同時視聴が確認された場合、原則いずれの単位も付与されませんのでご注意ください。
- 更新セミナーは、開始から終了まで通して聴講した場合のみ単位が付与されます。
- 単位取得のための申請等は不要です。(会場での聴講の場合は会員カードの打刻により、LIVE配信(WEB)およびオンデマンド配信での視聴の場合はアクセスログより聴講履歴を取得します)。
- その他の留意事項は、学会HP「[認定医更新セミナーについて](#)」に記載しておりますので単位取得を希望される場合は必ずご一読ください。

■ 2023年度の認定医更新手続きについて

2023年度の認定医の資格更新手続きを、以下の通り実施する予定です。

《2023年度の更新対象者》

認定期間が「2023年3月31日」までの方(認定医番号(6桁)の上2桁が「29」の方)

※認定期間、認定医番号については認定証をご確認ください。

《申請受付期間》

2023年3月～4月中旬を予定 ※郵送・消印有効

受付期間の詳細、申請様式、送付先、審査登録料振込先など、詳細は確定次第、学会HPにてご案内いたします。なお、更新をご申請いただいた場合、認定期間後(2023年4月1日)から審査結果が通知されるまでの期間は運用上、認定医資格を有する取り扱いといたします。

看護部会企画

第45回日本造血・免疫細胞療法学会総会で「わくわく」する体験を

名古屋大学医学部附属病院 看護部 山本 陽子

私は、第45回日本造血・免疫細胞療法学会総会で赤塚大会長のもと、看護系のプログラムの企画や取りまとめを担当いたしました。私なりに特に看護系の皆様に向けて、間もなく開催する総会を紹介させていただきます。

今回の総会のテーマは“Let's get excited about new technologies in transplantation and cell therapy”です。大会長が考えたこのフレーズを聞いて、私には新しい技術や新しい治療法に出会った時の「わくわく」感がまず思い浮かびました。一方で、看護の日常は泥臭い人間味があふれ、「わくわく」する体験がいつもあるわけではありません。また、忙しさに心を奪われ「わくわく」する瞬間に出会っていても、そのことに気づかないこともあるように思います。こうした日常の中にいる看護職こそが総会に参加することで、日常と切り離された場で新たな知識を得たり、施設や立場を超えた他者と「今という時」を共有したり、自分の思考が広がったりという「わくわく」につながると感じています。大会長が描く「わくわく」とは少し異なる視点かもしれませんが、看護職が「わくわく」する体験がこの総会で得られるように願っています。

さて第45回は、現地開催を原則としwebを併用した形式としております。Webは参加しやすい、現地参加かweb参加かで迷われる方もあると思います。どちらでも良いが…という状況で迷われている方は、ぜひ現地にお越しください。やはり、日常から切り離れた空気の中で味わう「わくわく」する体験は、貴重だからです。今回、看護の企画では海外のLTFUの今を知る特別講演も企画しております。海外における移植後患者さんの支援がどのようになっているのか、医療や文化の違いを超えて大切なエッセンスを直接聞くことができるチャンスです。同時通訳もつきますので日本語で質問もできます。

もう一つ、看護に関する現地参加ならではの企画をご紹介します。移植看護に携わる看護職は、日々の疑問や困難に関して他の施設ではどうしているんだろう、と思っても施設を超えて情報交換する場は少ないのではないのでしょうか。溜めこんだ(?)思いをお持ちの方も、ちょっと聞いてみただけという方も、ぜひ3年ぶりに開催する移植看護グループミーティングにお気軽にご参加ください。初めて学術集会に参加する方は敷居が高く感じるかもしれませんが大歓迎です。名古屋の地で一緒に「わくわく」する体験をしましょう。

最後になりますが、看護の企画にはたくさんの方々からお力添えをいただきました。ぜひ講師・座長・発表者・裏方などの皆様のパワーと参加される皆様のパワーを結集して「わくわく」する体験にしましょう。

私の選んだ重要論文

Exercise in allogeneic bone marrow transplantation: a qualitative representation of the patient perspective

Abo S, Parry SM, Ritchie D, Sgro G, Truong D, Denehy L, Granger CL.

Support Care Cancer. 2022 Jun;30 (6) :5389–5399.

造血幹細胞移植患者に対する運動療法は、身体機能や疲労、QOLを有意に改善することが複数のメタアナリシスで示されている。しかし、運動療法の実施率には大きな差があることが指摘されており、臨床においても嘔気、倦怠感、疼痛などの症状で運動療法が困難となる患者は少なくない。一方で、患者の中にはそのような症状が出現しても運動療法が可能である患者も存在することから、運動療法の実施に影響する因子は副作用等の症状に限らず多岐に渡ると考えられる。今回紹介する論文は、運動療法を実施する際の阻害因子と促進因子の特徴を患者に対するインタビューによって明らかにした報告である。

本論文の対象者は、同著者の2つの介入研究(Support Care Cancer, 2019; Bone Marrow Transplantation, 2021)に参加した骨髄移植後の35名(平均年齢46.9歳、男性62.5%)である。対象者に対し2つの研究において、入院中や退院後に、主に集団療法(理学療法士1名に対し患者5名程度)で筋力トレーニングや有酸素運動などの運動療法が行われた。さらに、対象者にはこれらの運動療法が終了した後2週間以内に半構造化面接でのインタビューが行われた。インタビューの内容は、主に運動療法の実施に関する経験や見解などであった。インタビューの分析は質的分析によって行われた。

質的分析の結果、運動療法実施の経験と見解は以下の6つのテーマにまとめられた。

- ① 動機付け(例、運動が回復に役立つ、身体の改善につながるという信念)
- ② 運動する物理的な機会(例、運動に用いる器具や場所、運動実施の容易さ)
- ③ 身体の状態(例、副作用の症状、価値観)
- ④ 集団運動療法時の心理的効果(例、同じ経験を持つ集団、コミュニティ意識の重要性)
- ⑤ 運動療法実施の経験(例、運動効果の実感、幸福感)
- ⑥ 運動療法の考慮点(例、個別化と教育の要望)

そして、運動療法を実施する際の主な阻害因子は、症状の重症度、運動設備の不十分さや運動場所へのアクセスの難しさ、促進因子は、スタッフからの励まし、集団療法時のピアサポート、運動プログラムに関する教育や個別化された運動プログラム、身体機能の測定だった。

本邦の運動療法は、理学療法士などによる個別療法のみで集団療法は行われない。今回紹介した論文では、集団療法によって運動の実施が促進される可能性が示されていたことから、本邦でも将来的に集団療法を取り入れても良いかもしれない。また、医療者との信頼関係の構築や患者教育など、個別療法でも運動を促進することのできる因子も多かった。本論文は、運動療法を効果的に実施するために工夫する余地が多分にあると考えさせられる論文だった。

虎の門病院 リハビリテーション部 市川 雄大

施設紹介

神戸大学医学部附属病院 腫瘍・血液内科

腫瘍・血液内科 准教授 薬師神 公和
副看護師長 土井 久容

神戸大学医学部附属病院は、山と海にはさまれた神戸市中央区にある大学病院で、地域がん診療連携拠点病院や兵庫県災害拠点病院、エイズ治療拠点病院等の役割を担っています。また、造血幹細胞移植においても地域拠点病院としてセミナー開催など積極的に活動しています。病床数は934床で診療科の数は35と非常に多く、多診療科による専門的治療が可能な施設となっています。さらに、患者さんに寄り添うチーム医療を実践すべく、医師、看護師、薬剤師、造血細胞移植コーディネーター、管理栄養士、理学療法士・作業療法士、臨床心理士等、多くの職種が連携・協働し、患者さんご家族の支援に携わっています。



腫瘍・血液内科では、臓器の枠にとらわれずに、すべてのがん患者さんを対象にエビデンスに基づいた診療を行っており、血液専門医、がん薬物療法専門医のどちらの資格を有する医師が複数名います。血液グループとしては、白血病やリンパ腫、多発性骨髄腫、再生不良性貧血等の診療に従事し、標準的化学療法、造血幹細胞移植の他、治験・臨床試験等も行っています。2002年に現在の病棟に移転し、移植病室としては、クラス100個室が5室、クラス10000の4人部屋が2室、クラス10000個室が6室あり、年間20～25件の自家移植と同種移植(骨髄・末梢血・臍帯血)を行っています。クラス100の部屋からは六甲山系を見ることができ、春から夏にかけては鮮やかな緑色に、秋には紅葉により赤く染まった山々の美しい景色を観ることができます。

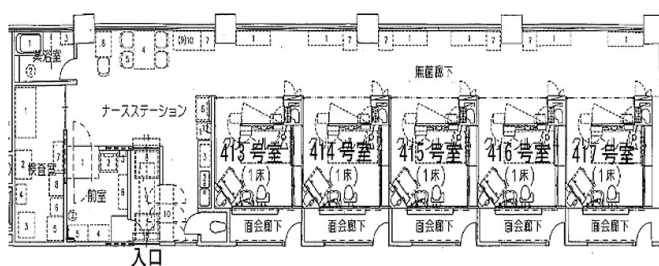
外来においては、造血幹細胞移植後のLong-Term Follow-Up外来を2006年より設置し、現在6名のLTFU Nurseが活躍しています。移植後は、退院後も長期に渡り、感染症やGVHD、晚期合併症などの様々な身体的問題が生じる可能性があり、また再発への不安など精神的な支援、就労・就学など社会復帰への支援も重要であり、多職種チームにおいて長期フォローアップの役割を担っています。

2017年頃からは小児科から成人診療科への移行期医療支援を行っています。当初は、戸惑いながら受け入れていたこともありましたが、課題や問題点の抽出を行い、その改善に向けて情報交換やカンファレンスを開催したり、小児科医からのレクチャーを受けて専門的知識を習得したりするなど、受け手側である成人診療科の不安軽減にもつながって現在ではシームレスな移行支援を行うことができるようになっています。

今後も最新の医療を取り入れ、多診療科・多職種と連携・協働し、患者さん・ご家族の希望に応え、QOLを維持・向上できるような関わりを行いたいと考えています。疫細胞療法の発展に寄与していきたいと考えております。



移植を担当するメンバー



当院の移植病室

会員の声

移植治療の魅力

九州大学病院 血液腫瘍科 森 康雄

留学中より親しくさせて貰っている筑波大学の錦井先生よりご指名をいただきました、九州大学の森康雄です。私たちの教室(第一内科)は、今では少なくなった大講座制を現在でも維持している組織です。学生時代に免疫学が面白いと感じ、将来は膠原病グループかな、などと漠然とイメージして入局を決めた気がします。そんな私が造血細胞移植に20年以上も関わることになったのは、研修医1年目に「移植治療は最も確立された免疫治療だ」と熱く指導頂いた諸先輩方(教授として戻られた原田実根先生、留学から帰国した長藤宏司先生・宮本敏浩先生、研究生を終え病棟指導医になった加藤光次先生、何とも眼光が鋭過ぎるメンバーですね)と、最初に担当した白血病の患者さんとの出会いに尽きます。小さなお子さんのいる母親で、「子供のために私は生きないといけない」と頑張っていました。合併症を乗り越え無事に退院を迎えられたとき、嬉しくて涙が出た経験はこの時だけかもしれません。不幸にも若くして大病を患った患者さんの人生を背負って治療にあたる責任の重さと同時にやり甲斐を感じました。「先生が外来するようになったら患者第1号になってあげる」の約束通り、20年経っても元気に外来に来てくれる優等生で、骨髄バンクドナーの普及活動もされています。経験が増え良くも悪くも結果を先読みしがちな時に、初心を思い出させてくれる有難い存在です。

移植治療では各フェーズで様々なことが起こり、あちら立てればこちらが立たぬといった状況の中で、うまく折り合いを探っていくところに要点があります。厳しい状況を打破するためには粘り強く考える気合い・体力(かなり前時代的な感じですが、いずれは移植合併症の診断や治療方針決定にもAIが威力を発揮する日が来るのでしょうか?)とともに、看護師、リハビリ、歯科、栄養士、薬剤師など多くのメディカルスタッフとチーム医療を実践していく協調性が求められます。そこにドナーさんやそれを支えるコーディネーターさんの善意が加わり成立するものなので、まさに人間力が問われる治療だなあと感じます。ですので基本的に人間好き、議論好きが多く、他施設の先生方とも仲良くなれるところも大きな魅力ですね。これからも魅力的な同志にたくさん出会えることを願っています。

血液疾患に対して、移植が必要なくなるような安全かつ有効な治療法が生み出されるのが理想なのかもしれませんが、暫く先になりそうです。当面、この移植治療の世界で頑張りたいなと思っています。現在、九州一円からCAR-T細胞療法の患者さんを紹介いただいております、本年度は遂に同種移植数とCAR-T輸注数の逆転が起こっている状況です。必要な方に適切な治療を届けることが必要ですが、CAR-T治療後の管理も同種移植の経験が活かされますので、移植拠点病院の名に恥じないよう、移植数もしっかり増やしていこうと考えています。今回は、レジデント時代にともに移植を頑張った友人、岡山大学の浅田先生にバトンを渡します。

次号予告 今回は、岡山大学病院 血液・腫瘍内科 浅田 騰 先生です！

各種委員会からのお知らせ

【HCTC委員会】

2022年度から委員長を拝命しました、東京慈恵会医科大学の矢野です。HCTCは患者・ドナー及び家族の支援、関連施設との円滑な連係、倫理性の担保、リスクマネジメントに関わる専門職です。認定HCTCを取得するには、認定講習Ⅰ・認定講習Ⅱを修了していること、HCTCとしての実務経験を2年以上有すること、本学会会員歴2年以上でかつ年会費を完納していることが要件となります。2022年度より各地域におけるHCTCの人材育成を促進することを目的に、HCTC認定研修の受け入れを開始しました。通算20日以上研修を受けることにより、認定HCTCの知識と経験を短期間で修得することができます。ご質問がありましたら、HCTC委員会相談窓口（hctc-sodan-jshct@umin.ac.jp）までお問い合わせください。

委員長 矢野 真吾
(東京慈恵会医科大学 腫瘍・血液内科)

一般社団法人 日本造血・免疫細胞療法学会 事務局

名古屋市西区那古野二丁目23-21-7d号(〒451-0042)

Tel: 052-766-7127 Fax: 052-766-7137 E-mail: jstct_office@jstct.or.jp <https://www.jstct.or.jp/>